



町民文芸

只見短歌会 令和五年四月詠草

頂きし花は日毎に色増しぬ逝かれし歌友の面影浮かびぬ
馬場 八智

友や姉逝きて忍びし生前の一挙一動昨日のごとく
関谷登美子

花ばなの種類ちがひど萌へ出でし芽は皆同じことぶき色なり
目黒 富子

君が言ふ「ちよつと聞いて」に身構へる昨日の「ちよつと」は一時間越へ
立花 奏音

家飼ひの猫らは雪の冷たさを知らずに窓の外を眺むる
新国由紀子

忘れむと漢字書きをれど気がつけばひらがな多き文字の並ぶも
渡部ヨリ子

黒き薔薇咲きしと声をあげし孫鉢植を持ちきて臥す窓に置く
故 新国 洋子（遺作）

（出詠順）



只見俳句会 四月定例会

日高俊平太 指導

一輪の若葉大きく絵手紙に
黄砂ふる大古の村の物語
恒 夫

朝焼けの雲を水面に二月果つ
春めくやごぼんと樋を通る水
礼

たんぼばの絮飛んで行け母の墓
雪囲い取る八十五才腰に鉈
一 穂

水温む雀もきたるお葬式
春寒し茶飲み話に空き屋のこと
修 一

春寒し色あせし本大江逝く
春来るチア足高くスタジアム
信

料峭やゆるりゆるりと巡り行く
卒業す制服姿晴れやかに
都

三月や鯉の尾びれのき揺ぎて
辞書ごとに眼鏡をかえる日永かな
味代子

眼鏡とり目をこする夫春隣
シヨベルカー雪のあざらし五十四
真理子

青空の見えざるままに鳥帰る
二月尽山鳥の声二度三度
紺 青

